

【論文要約】

本論文は、クライアントとセラピストとの二人が出会うところで進んでいく心理療法において必然的、偶然的に起こりうるセラピストの「不在」に着目し、その「不在」が治療関係や治療的相互交流にどのような影響を与え、どのような意義をもつのかということ問うことによって、心理療法におけるセラピストの「不在」に関する問題について検討し論考するものである。

これまでの臨床心理学理論や臨床実践において、一般的に議論の対象となっているのは、クライアントと出会っている時間や面接場面におけるセラピストの存在と治療的かわりや技法であり、主にそれらの研究が進められてきている。本論文では、セラピストの存在が心理臨床的な意味でクライアントに体験されるときは、セラピストのこころの機能が治療的に働いているときであり、それはどのように作用しているときであるのかと問題を提起し、セラピストのこころの機能の治療的な作用について検討する。そのうえで、セラピストが客観的に実在しない「不在」を「外的な不在」、そしてセラピストは客観的には実在してはいるもののクライアントにはあたかも存在していないかのように主観的に「不在」と体験される転移状況を「内的な不在」－「主観的な不在」、さらに、セラピストのこころの機能が治療的には機能不全となる状況を「内的な不在」－「機能不全による不在」と分類し定義づける。このセラピストの「不在」の定義のもと、精神分析的な心理療法の実践からセラピストの「不在」を検討し、クライアントとセラピストの心理臨床における本質的な「関係性」について論考をすすめ、さらには人が生きていくうえで繰り返し体験する分離や別れ、喪失にも繋がる「不在」体験と、「不在」をめぐる「かなしみ」の情緒や苦悩を人はどのように乗り越え、生きる力へつなげていくのかという今日的なこころの問題や課題について本論文は展望するものである。

第1章では、現代社会にみられる対象の「不在」として、情報化や文明の発展によって“待たないでいい社会”になり、児童虐待、うつといったこころの問題が顕在化し注目されていることを「待つ」ことをめぐ

って論述する。そして対象喪失、対象の「不在」によって生じる苦悩にどのように取り組み、こころの成長や生きる力へと繋げていくには何が必要なのかと問題提起し、心理臨床における「不在」として、本研究におけるセラピストの「不在」の分類と定義、本論文の問題の所在と目的、構成について明確に述べる。

第2章では、母子関係にみる「不在」のあらわれとして、共働き家庭における母親の「不在」を、母親と子どもたち双方がどのように体験しているのか、こころの発達における対象の「不在」体験について、それが与えるこころの成長や思考の発達、情緒発達への外傷的な影響について先行研究をもとに論考する。さらに、専業主婦家庭と共働き家庭の母子を対象とした筆者の先行研究から、実際に物理的な「不在」の時間が長いことは必ずしも心理的「不在」に繋がらず、「一人でいられる能力」(Winnicott,D.W.)は、個が個として「一人でいられる」ようになることで達成されるというものではなく、誰か意味ある他者の存在をこころの中の“普遍”なものにできることで達成されるものであること、そして「一人でいられる能力」からひろがる体験世界、母子の間に広がる関係性、「酵素」としての“ほどよい母親性”について考察する。

第3章では、心理療法においてセラピストが異なれば、クライアントとの間では当然ながら各々の関係が生まれること、そのとき、セラピストのパーソナリティやパーソナルな体験をも加味したセラピストのこころの機能は軽視できないことに着目し、セラピストの存在としてのセラピストのこころの機能の治療的作用について検討する。このセラピストのこころの機能は、心理療法のアプローチやそれが依拠する理論的立場の違いがあつたとしても心理療法を展開させていくためには欠かせない極めて重要なテーマである。無意識を重んじてクライアントと関わるセラピストのこころの機能は、精神分析学だけにとどまらず、ユング心理学などの他学派でも共通するところがあることを検討し、精神分析的な心理療法のなかでも対象関係論を中心とした臨床実践をもとに、セラピストのこころの機能の整理を試みる。それらの試みから、セラピストのパーソナリティや人間性、セラピストアイデンティティを中核にして7つ

の機能が重なり合うことが見出され、そのセラピストのこころの機能の作用は、クライアントの病態水準や個々のクライアントとの関係性において多面性と多層性をもって複雑に働き、その本質的な働きは「酵素」のようであることを図示し、考察する。

これらの論述を踏まえて第4章では、セラピストの「外的な不在」が心理療法に及ぼす影響について精神分析的な心理療法の実践から理論的考察を試みる。心理療法では、セラピストの「外的な不在」は面接の頻度に絡んで必然的に起こり、そこでクライアントが繰り返し体験する「分離の不安」は、精神分析や精神分析的な心理療法において特に重要視されている。この必然的、偶然的に起こりうるセラピストの「外的な不在」の多様な状況をクライアントは主観的にどのように体験するのかを精神分析的な心理療法の実践から先行研究をもとに分類すると、クライアントにとっては、対象の「不在」が「不在の対象」からの攻撃として、または対象との分離が一時的な「不在」を意味する「分離」として、あるいは長期に亘る突然の「不在」は心理療法の中断やセラピストの交代など危機的な局面を招き、それが永久的な「不在」である「喪失」として体験されるときがあり、セラピストの「不在」の体験の在り様は個々に異なることがわかった。さらに、このようなセラピストの「不在」をめぐるクライアントの空想や中核的な不安が賦活され、過去の心的外傷体験の再現、再演になりうること、分離や対象喪失、対象の「不在」をめぐる体験に伴う情緒である「かなしみ」に着目するとともに、その情緒体験についても詳述し考察する。この第4章の最後には、セラピストの「外的な不在」に関するクライアントの体験の水準、あり様を理解することは、クライアントの病態水準、パーソナリティや対象関係の見立てと理解に役立つことを述べ、セラピストの「不在」をどのように予告するのかという技法的な工夫を含めた考察を行う。

続く第5章以降では、第4章までの主に理論的な論考を臨床実践から検討することで本研究の目的をさらに明らかにする。第5章では、セラピストの「外的な不在」の一つの典型的な例として、女性セラピストの妊娠・出産による「不在」を取り上げ、セラピストの「外的な不在」を

「不在である」と体験するのではなく、「不在の対象」からの迫害的な攻撃として体験した，妄想－迫害性の不安を抱く重篤な事例を検討する。心理臨床におけるセラピストの妊娠・出産は，クライアントの中核的な不安を賦活し，一方，セラピストは妊娠・出産期特有の状態に加えて特異な逆転移感情を抱きやすく，その治療的相互交流について考察する。

続く第6章セラピストの「不在」による「かなしみ」－孤独感－の再演でも同様に，セラピストの妊娠・出産による「外的な不在」を取り上げるが，ここではセラピストの「不在」を契機に，クライアントの凍結されていた過去の心的外傷体験が再演され，これまで凍結されていた「かなしみ」の情緒，とりわけ孤独感が転移的に生き生きと体験され，心理療法に進展がもたらされた事例を検討する。その治療的相互交流を「かなしみ」の視点から検討し，セラピストが自らの私的な理由で「不在」になるとときには，特に罪悪感などの逆転移感情に圧倒されやすく，その逆転移のあり方やモニタリングの難しさについて考察する。

第7章セラピストの「内的な不在」では，セラピストの性別やキャリアに関係なく，心理臨床の場面に実在しているセラピストが「内的な不在」となる難しい治療関係について，セラピストの「内的な不在」という心理療法の行き詰まりに陥りやすいといわれるパーソナリティ障害のパーソナリティ病理と対象関係について先行研究から概観し，その後，セラピストがクライアントの目前に実在しているにもかかわらず，クライアントにとってはセラピストが「不在」であると転移・逆転移関係において主観的に体験された「内的な不在」の事例を検討する。

一つ目の事例では，セラピストが主観的に「死んだ対象」として体験された「主観的な不在」を取り上げ，そこで展開した転移・逆転移関係を生きるなかで「死んだ対象」からセラピストとして徐々に蘇るプロセス，そこに伴う「かなしみ」の情緒について考察する。

二つ目の事例では，クライアントと情緒的に触れ合うことができずに心理療法は行き詰まってしまい，セラピストが「機能不全による不在」となった関係から，情緒的に触れ合う関係へと変化し，心理療法の終結に至った過程を検討する。このセラピストの「機能不全による不在」で

は、セラピストが逆転移感情に圧倒され、クライアントはセラピストに理解されたとは体験し難い関係に陥りやすい。激しい行動化によって、クライアントの願望に応じるように、セラピストに無意識の圧力をかけて屈服させてくるクライアントとの関係では、セラピストは逆転移感情に圧倒されて機能不全となりやすいが、表面的にはクライアントとの心理療法は進展しているかのような錯覚や共謀関係に陥りやすい。そのような関係に陥った事例のパーソナリティ病理と対象関係を考察したうえで、セラピストの「内的な不在」から蘇るプロセスに現れる関係性を、めぐり会いの時間の観点から考察するとともに、セラピストがクライアントを理解することと、クライアントがセラピストに理解されたと体験されることとの齟齬、その状況から脱却していく治療的相互交流について論考する。そうして第7章の最後では、これまでの事例検討から導き出された心理療法の枠組みを整えることの大切さに言及しながら、こころの機能の揺らぎからセラピストが生き残るための技法的考察を行う。セラピストが「内的な不在」から蘇るためには、セラピスト自身のこころのスペースを保ちつつ地道に考え続けられるようになるためには、逆転移感情の吟味が不可欠であり、その逆転移感情の吟味の遂行と、それを支持するスーパーヴァイザーの存在、スーパーヴィジョン関係についても考察する。

最終章の第8章では、これまでの論考から、セラピストの「不在」の中から「在」を見出すこと、セラピストの「不在」をめぐって往還する「二重性」なるものと往きて還らぬ時間、心理療法の深奥に存在する「かなしみ」、「酵素」としての触媒作用をもつセラピストの存在について総合的な考察を行う。

セラピストは、クライアントとの間にある関係性の質を感知しながらセラピストのこころの機能を治療的に働かせる役割を発揮することについて、そのセラピストの存在は、母子関係における“ほどよい母親性”とも重なり合い、クライアントとの治療関係の場に従って触媒として「酵素」のように多面性と多層性をもって作用するものであるといえる。

さらに、本論文全体を通して見出されたセラピストの「不在」と「在」

との関係性と、その治療的相互交流のパターンを見直し、それをセラピストがある程度認識しておくことの意義、セラピストの「不在」をめぐって、これまで凍結されてきた心的外傷体験や「かなしみ」の情緒が転移的に生き生きと再演されることから心理療法の深奥に存在する「かなしみ」と「かなしさに由来したやさしさ」について考察を深める。

このようなセラピストの「在」から「不在」へ、「不在」から「在」への移行のなかに包含される「外的な不在」と「内的な不在」の位相について図示することを試み、セラピストの「不在」をめぐって体験される往きて還らぬ時間について、第2章で考察した Winnicott のいう「移行対象経験」や「潜在空間」での体験と意味ある重なりを見出し、そして「めぐり会いの時間」が実感を伴って認識できることから対象喪失を悼むプロセスが動き出すことの意義について考察する。さらにセラピストの「不在」から生き残ることについて、「不在」の彼方に現れるものとして、クライアントが過去の対象喪失と現在にめぐり会い、凍結してきた「かなしみ」の情緒を現在に体験できるという「二重性」、セラピストでありながらクライアントにとっての重要な対象を生きるという「二重性」、
「不在」に伴うかなしみや痛み、諦めきれなさやわりきれなさという「二重性」をクライアントもセラピストも生きるという本質的な関係性について論考する。このように本論文全体を通して得られた心理療法におけるセラピストの「不在」に関する知見は、今日的なこころの問題、心的外傷や対象喪失のこころの問題についての理解にも繋がるものであり、心理療法におけるセラピストの「不在」を論じることによって、心理療法における本質的な関係性に迫ることが可能となったと考える。